

寄稿

読書と教育

林 好 雄

子供のころから本ばかり読んでいたので、学校に通うよりも前に、図書館に通うことを覚えた。小学校の帰りに図書館で本を借りると、夕食前に返しに行き、もう一冊借りるのが日課で、あとは翌日また図書館に立ち寄ることだけが楽しみだった。授業がおもしろいとか楽しいと思ったことは一度もない。だから授業中はいつもぼんやりしていた。そもそも一時間もあれば読めてしまう教科書を、どうして一年間かけて授業するのか理解できなかった。その教科書にしても、たとえば国語の教科書には、夏目漱石だとか川端康成だとか見覚えのある名前を目にすることもあったが、開いてみると作品全体のごく一部が無残に切り取られていて、それも選りによってその作品の一番どうでもよいと思われる部分が載せられているのだった。「神は細部に宿る」ということが真実だとしても、教科書を作る人というものは、よほど間の抜けた人たちだと確信した。歴史の教科書にしても、そこには年号や人物や事件が羅列されているだけで、ただ暗気力の競争のためにのみ役立つという代物だった。のちに岩波の世界歴史や日本歴史を覗いて、中世の荘園制のことを調べたときに、歴史教育の存在する理由が多少わかったような気がした。

私の読書の楽園時代は、中学生のとき、ドストエフスキーの『罪と罰』や『カラマーゾフの兄弟』、スタンダールの『赤と黒』や『バルムの僧院』を（もちろん翻訳で）読んだころに、突如として終わりを告げた。高校時代にはカフカやカミュやボルヘスを読んだし、その後ジョイスの『ユリシーズ』やブルーストの『失われた時を求めて』を知ったが、読書のみが齎すあの忘我の喜びは二度と戻ることはなかった。

高校のころから詩や評論を読むようになり（ボードレールやマラルメといったいわゆる象徴派の詩人を好んで読んだ）、自分でも拙い詩や短篇を書くようになった。アンダー・グラウンド地下演劇の劇団に参加したこともあった。相変わらず本は読んで

いたが、何かの目的のために読む本はつまらない。ただおもしろいから読むというのであれば、本当の読書ではないと思う。授業がおもしろいとか楽しいと思ったことは一度もないと書いたが、それでも幸運なことに先生と呼べるような人には何人か会った。一人の詩人（オスカー・ワイルド学会で西脇順三郎の講演を聞いた）と一人の小説家（久しぶりに帰国した江原順氏が私を埴谷雄高の自宅に連れて行った）にも会った。彼らが一様に教えてくれたのは、「自分で考え、自分で学ぶ」ということだけだった。そしてその人たちのおかげで、今度は自分が、おもしろくも楽しくもない授業を四半世紀以上も続けることになった。その間に、主としてマラルメ、道元、デリダに関する論文をいくつか書き、翻訳書を何冊か出した。ちなみに『駿河台大学論叢』の最新号に掲載した論文は「教育と友愛—ハイデガー、道元、デリダ」である。

ハイデガーの『「ヒューマニズム」を超えて—パリのジャン・ポーフレに宛てた書簡』（一九四七年）によれば、西洋形而上学に端を発する近代の諸学問（私は文学部の出身であり、経済学部の教員を長く勤めた）は、「[学]や「研究」を目指すという不適切な意図を捨て去ること」ができないために、「存在の開示性を、自分たちの発語によって、言葉へともたらし、言葉のうちで保存する」²という思索の本質を忘れている。「こうした分野別の学問的諸学科が成立するのは、思索を「哲学」へと変貌させ、しかも哲学をエビステーメー（学問）へと変貌させ、果ては学問そのものを学校や学校事業に属する事柄へと変貌させてしまうような時代において」³なのだ。

思索がみずからの境域から離れ去ることによって、終わりに至るようになると、思索は、この損失を償うべく、テクネー〔技術的知〕として、教育の道具として、それゆえに学校での事業として、そしてのちには文化事業として、世間から認めてもらおうとするようになる。哲学は、徐々に、最高の諸原因にもとづいてものごとを説明してゆく技術になり果てる。世

1 マルティン・ハイデッガー『「ヒューマニズム」について』、渡邊二郎訳、ちくま学芸文庫、125～126頁。

2 同前、18頁。

3 同前、116頁。

間のひとは、もはや思索をしない。そうではなく、むしろ、世間のひとは、「哲学」と称する営業に従事する体たらくとなる⁴。

ハイデガーはまた、一九四三年夏学期のヘラクレイトスに関する講義の中で、「教育」の「本質根拠」を「思索さるべきものに寄せる友愛としての哲学」⁵だとしている。「授業」とは、自分の持っている、自分に属している知識や技術の授与ではない（授業料を代価とする交換や商取引でないことは言うまでもない）。それは、「他のものに、他のものが持っている本質を恵み与える恵みであり、しかもそれは、その恵み与えによって恵み与えられた本質がその固有の自由に向かって開花するという仕方では、恵み与えられるところの恵み」⁶なのだ。「教育」の「本質根拠」としての「友愛」がなければ、この見返りを求めない根源的贈与がなければ、「すべての授業とあらゆる修練、すべての学科とあらゆる訓練は、その生い育った根拠にして生い育ちつつある根拠を欠くことになる。それらのものが此方へ前に齎している〔産み出している〕ものは、一つの訓練であって、その訓練は事が真剣になるや否や、たちまちその固有の空しさの内に頽れてしまう^{くずお}』と、ハイデガーは言っている。

学生諸君、赦してほしい。私は、教師失格だった。私は、決められた学科（私はフランス語の教師だった）を手際よく教えるだけの意気地のない教師だった。きみたちに「恵み与えられた本質がその固有の自由に向かって開花する」のを忍耐強く見守る「友愛」を持たなかった。「教育」の実学化や営業化を命がけで阻止することをしなかった。「教育」が「訓練」になり果てるのを黙って見ていた。賢明な諸君はたふんとくに気づいていたことと思うが、私もまた彼らの手先^{シユボ}だったのだ。私は、その罪が赦されるものだとは考えていない。それは、私が一生担っていかなければならないものだと思っている。

4 同前、25頁。

5 マルティン・ハイデgger『ヘラクレイトス』、辻村誠三・岡田道程・アルフレッド・グッツオーニ訳、『ハイデgger全集』第55巻、146頁。

6 同前、同頁。

7 同前、同頁。